第三編 古

代

され、

つ

いに隋は滅亡してしまう。

## 第一章 古代概説

## 第一節 律令以前

## 一 仏教伝来と社会情勢

が高句 たが、 煬帝 ○万の の の 、 が交戦する。 国との国際的な緊張が高まり、 際関係が形成され、 に煬帝が即位すると、 隋による統一王朝の出現から間もない五九八年、 揺 内 0 れ動く東アジア 麗軍 悔 その後両者 高句麗の謝罪的後退もあって、 乱 軍勢をもって高句麗を攻めるが、 しさは募り、 が続発す の激しい抗戦に遭い、 このとき隋は、 る中で、 の対立は一層激しさを増していく。六〇五年 唐時代に至る約一 翌年、 その勢いは激化し、 六世紀から七世紀にかけて、 現により、 六一 翌々年にも大軍をもって攻撃する 水陸軍三〇万を高句麗に向 内乱や動乱 八 東アジアは隋を中心として国 と同時に国内は疲労困憊にな 年煬帝は 世紀にわたって、 戦争には至らなかったも むなしくも敗退する。 五九八年、隋と高句はの時代が続いた。 六一二年、 江 都 (揚州) 隋』 帝 隋は一〇 周辺 で惨殺 かわ、 玉 句麗り 0 せ 出

○七年には小野妹子、六一四年は犬上御田鍬らを隋に派遣し、る朝鮮三国に対し有利な立場を維持しようとした。そして、六係を考慮し、推古八年(六○○)に遣隋使を派遣し、隣国であこの激動する東アジアの中での倭国は、隋と高句麗の緊張関

同時に留学生・僧たちが海を渡ったのである。

百済、 るが、 の初め(五八九)に七部の楽を定めた時に疎勒、 た時に歓迎の音楽を整えていたのである 遣隋使に関係する記事は 突蕨、 両間にかなりのずれ 新羅、 倭国などの技を設けた」とあり、 が生じている。 『日本書紀』と中国の 『隋書』 扶 には 隋 南 使者がな 書 康 国 開 が 来 皇 あ

行に鞍 れ た。また、 豪族春日氏の流れをひき、 いわれる渡来人であった。 には 『日本書紀』によると、 作福利を命じたことが記されている。 福利は仏教興隆に通じていた司馬達等たちと同 この時、 小野妹子を隋国 近江国滋賀郡小野に本拠 隋の煬帝に国書を渡し、 使者とし、 小野妹子は 地 を置 そ 有力 族と 0 11 同

「日出ずる処の天子、日没する処の天子に書を致す。恙無「日出ずる処の天子、日没する処の天子に書を致す。恙無

卿という者を叱ったという。 と記され、 たものと思われる。つまり、 仏法を学ぶ心に会見を許し、 きや 倭を隋と同列におくもので、 云々」 東の 煬帝の不興をかいながら、 煬帝は仏教徒であり、 国に仏法を広めることを願 煬帝はそれ 小野 を見て鴻臚 妹子 倭は自

尊 国を味方に入れておく必要があったことも事実である。 入らなかったのである。 の態度を示した。 以後、 また、 隋と国交はしたものの冊封体 高句麗と対立していた隋 特制には は、

倭

大をめぐって互いに争った時代である。 鮮三国の動乱 半島は新羅、 倭国に仏教が導入される六世紀半ば、 高句麗、 百済の三国が領土拡 朝 鮮

六〇〇年から年代順

一者の戦略ぶりを追ってみよう。

六〇二年 百済、新羅を侵略する。

六〇三年

高句麗、

新羅を侵略する

六〇五年 新羅、 百済を侵す。

六〇八年 新羅は隋に高句麗を征伐するよう要請する。

六一一年 百済、 隋に高句麗征伐要請

六二一年 新羅は唐に遣使を送る

六二四年 百済、 新羅を侵略

六四二年 百済と高句麗は新羅を侵略する。

六四三年 新羅は唐に救援を要請

六六〇年 新羅連合軍は百済を滅ぼす。

六六一年 新羅は高句麗を侵略する。

でも新羅 を伺い、 を最大に生かし、 三者は互いに侵略しながらも、常に大国である隋 更には倭国をも牽制している状況が読みとれる。 の勢力が 強く、 「真興王巡狩管境碑」と称する石碑を朝鮮半 五四 ○年に新羅の真興王は自身の勢力 唐 0) なか 清勢

> まり、 界三か所(北方から麿雲嶺碑・黄草嶺碑・ 碑には彼の偉業が記されている。 交渉を開こうとしたのである。 を新羅のものとしたことなど、 麗と百済の領土抗争に割って入り、 立したと記されている。特に北漢山碑 東南隅から中央部まで及び、 島三か所に建立した。真興王は第二十四代国王(五四〇~五 六歳にして即位し、 朝鮮半島の西海岸を占領することによって、唐との対外 仏教文化の振興に尽力した王 高句麗に対する防御作戦として境 彼の攻略成功がうかがえる。 それによると勢力は朝鮮半島 両者が欲しがっていた領地 (現ソウル)には、 北漢山碑) に石碑を建 で、 高句 つ

ある。 のにした。以後、 そして、官僚組織を整備し、 高句麗・ 人が選ばれると、 任那滅亡まで続いた朝鮮半島 新羅は地方制や軍団制を整備し、有力者から実力のある者 新羅がそれぞれ独立した形をもって国政にあたった。 国王の周りに結集し権力を拡大していった。 新羅国は滅亡まで四○○年の間存続したので 真興王時代の政治基盤を盤石なも の三 国 動乱は、 その 後、 百済

都を長安城(現平壌市内)に移したのもそのような背景があ きった政局転換を図る必要があった。 たからであり、 新羅 ・ 方、 高句麗は六世紀前半ごろ王位継承をめぐる紛争が勃発 百済等の外戦と内乱とで苦しい状況にたたされ 内外政を確 固たるものにするためには、 思 た。

ŋ 興に取り組んだ。 余)に移し、 るにすぎなかった。 任那諸国との合併施策は停滞し、 百済は五三八年、第二十六代聖明王が都を泗沘 中央組織の体制整備はもちろん、 しかしながら、 五五四年に新羅と交戦にな 新羅の 任那討伐を傍観す 仏教・文化の振 (現 扶

倭から日本へ この頃からである。 日本という「日」の字が使用され始めたの 改称 の最 大の 理 由

は は

「日」の字をふくんだ国書あるいは国号を使用したことにあ

現は、以後平安時代に至っても語源の論議が繰り返され、 は「日の出ずる処に近いから日本と改めた」等と説明してい 本」と称した語源の意味については定かではないが、『旧 対象にした表現であり、 していった。 (七〇二)の遣唐使からである。この「日本」についての表 事実、「日本」を正式の国号として使い始めたのは大宝二 遣隋使に使用された「日出ずる処の天子」はまさしく隋を 重要な意義があったのである。 [唐書] 定着 一日

蘇我氏と物部氏 東アジア諸国において、 全国統 朝 鮮二 国の 南北朝末期から隋 動乱と揺れに揺

た時代、 時代へと動き始めたのである。 倭国にお W ても有力な豪族たちの対立があった。 新し

Ħ 本書紀』 が伝える内容は、 仏教公伝の 時

蘇我稲目が自宅に仏像を安置し崇拝していた。日頃から豪族達は稲目を

n

仏像を難波の堀江に捨てた。ところが雲がないのに雨が降るという変事 子等は稲目が祀った仏像に神の祟りがあったのだとして家を焼き払 疎ましく思っていた。その矢先に疫病が流行した。 病にかかったのである。 が起こり、これは仏を蔑ろにした罰だ。そして敏達天皇と物部守屋は疫 物の 部尾輿のべのおこし 中なか 臣ぬのかま

たり、 次のように述べている。 権力闘争にあり、 物部守屋はそれらのことをよく思わなかった。根本的な原因は 姫・炊屋姫(後の推古天皇)は桜井寺等で仏教を広め崇拝した。 たのが大臣の蘇我馬子と大連の物部守屋である。 問題をめぐって論争が繰り返されていた。その先頭に立って とある。 いもので馬子も仏像を祀るようになっていた。 仏像を祀らせたりし、馬子自身は豊浦寺で、 更に敏達朝の時、 事実『日本書紀』は馬子と守屋のやり取りを まだ聖徳太子が少年時代、 彼は、 ĺП. 妹の堅塩 は争えな 塔を建て 皇位 継 承

13 たことに対し 場面は敏達天皇葬儀時、 蘇我馬子が体に合わぬ大刀を帯びて

物部守屋は「矢が刺さった雀みたいだ」と嘲笑

蘇我馬子は 「鈴でも懸けたらいい」

n

と公の場においても争いは絶えなかったという。

は用明天皇の異母弟にあたる穴穂部皇子を立てようとした。 に対し蘇我馬子は、 更に、 聖徳太子の父用明天皇が病没してしまうと、 やはり異母弟である泊瀬部皇子を対抗 物部守屋

するようになる。

死し、泊瀬部皇子は崇峻天皇となり、 して戦ったらしい。 いに抗戦状態になった。 結果として物部守屋・ 記録では河内の渋河を中心と ゆくゆく蘇我馬子と対立 穴穂部皇子らは交戦

あり、 存在は大きく、 をつかさどったが、 帝となった推古天皇においても、 代から開放的で、 面も伺える。 た刺客に殺され、 の天皇を出している。 馬子のわがままな実権がまかり通っていった。 我氏 娘の堅塩姫と小姉姫を嫁がせ、 0) 権力が確実なものになったの 氏姓制度を官僚制度に変えようと努力した場にせいせい かんりょうせいど かんりょうせいど かんりょうせいど 新田 大田 の単徳太子には経験豊富な蘇我馬子の 馬子の権力は増大する一方であった。 渡来人と親交を深くし、 崇峻天皇は即位して五年目に馬子の 甥の聖徳太子を摂政とし政治 用明・崇峻・ は物 皇室とも親近関係に 部氏を倒 彼の 推古と三人 初の女 した後 父 への時 放

神聖な場所として、 た土・水・太陽の神々であり、 は農耕の神であった。 仏教興隆と を含む森羅万象の中で、 H 宗像三神は著名である。 本の 文化 神は天照大神を初めとし、 元来、 営む場所には深く関 神がやどる神社 農耕社会で必要なのは、 日本の信仰は神にあった。 恐れられるものは神として崇められていたので 江戸時代 そこに穢. 海 山 代の国学者本居宣長 が祀られた。 わりを持ち、 木 れから厳重に守られ 草・ 獣 五穀豊穣 人々が その主 鳥などの 海の神も同 を願 上たる神 と生活を 動 植 た 物

と説 うようになる。 る共通した地域の崇拝の対象となり大きく発展し、そこに の心情に発するものである。 神に対する人間支配者が存在し、 いている。 神への信仰は本来個 また、 神の威光と称し権力を振 信仰は一族や部落、 マの É のであり、 個 |人個 W わ 地 人

0

の反発を振り切り、崇仏に賛成している蘇我稲目に仏像を祀ら たる。 とされており、 れば、 せたのが仏教の公伝とする説である。 宮聖徳法王帝説』 明天皇に「釈迦像、 仏 神 新しい信仰宗教が日本に入ってきたのは、 教の伝来については日本書紀以外に、『元興寺縁起』 の国に、 つまり、 欽明十三年 仏を崇拝 その年代は 欽明天皇が仏教を受け入れたいが があり、それには五三八年に仏教が伝わった 幡、 (五五二) に朝鮮半島の百 するという信仰宗教が入ってきた。 教典」などが贈られたとされてい 『日本書紀』に従えば宣化三年にあ 済国聖明王 『日本書紀 ため物部氏ら 一から欽 る。 によ 正

至 仏の詔を下すが、 廷はこの対立を重く見て、 神 朝 祇 った。そして、ここに公的に仏教を取り入れることとなった その後、 廷も味方し、 信仰であった反崇仏派の物部氏・ 仏教導入の賛否を巡って、 聖徳太子・ 物部守屋らが反乱を起こしたため、 いったん天皇は敏達天皇十四 蘇 我馬子らは 崇仏派の蘇我氏と従来 中臣氏らが 物 部 守 を減を減 対立 翌 した。 ぼすに [年の廃 々 朝 0)

世

のである。

至っている。更に、日本歴史の中で、宗教を導入することで「戦 以後、今日に至るまで人々の思想宗教としての基盤を築くに い」を行ったのはこの時だけと言える。 この宗教「仏教」 は、 日本国に大きな社会変革をもたらし、

が誕生したのである。 済に派遣した。そして、飛鳥真 神 原に法興寺 済から僧侶・仏舎利・寺工・露盤博士・瓦博士・画工らが来訪 立したことが記されている。ここで日本で初めて本格的な寺院 蘇我馬子は百済の僧から受戒し、 日本書紀』によると、崇峻天皇元年 学問僧として善信らを百 (五八八) (飛鳥寺) 秋七月に百 を建

興隆に努めた。 あってか太子は約四十年間斑鳩に住み、 皇で仏教帰依の意思表示をした最初の天皇である。その影響も 終始したように言われている。つまり、 仏教思想を確立することにあったが、 仏教公伝に聖徳太子の担った役割は大きい。彼の父は用明 l間は虚仮にして、ただ仏のみ真なり 聖徳太子のねらいは一つに仏教文化、二つには 結果的には個人的信仰に 太子は 飛鳥の地も含めて仏教 天

「界のみが真実であると解されている。 わ n ているように、 人間世界を否定的に捉えており、 仏 0

半ごろには聖徳太子の政策によって政治を行うようになった。 古朝 からの 太子は天皇と蘇我馬子の 調整役であ ったが、 後

- 隋との外交開花
- 冠位十二 階の制定
- 法興寺をはじめとする仏教寺院 0) 建立
- 十七条憲法の制定
- 三経義疏
- 地方政治の整備

耳命」と書かれている書籍・教科書が多くなってきていなったと らは、 調査研究により、「聖徳太子」という名称を改め、 し得なかったと解する者も多い。 などが主な施策であるが、 必ずしも彼の政治改革は評価されたわけではなく、完結 『日本書紀』をはじめとする文書か 蘇我蝦夷と入鹿が死んだこと 最近に至っては、 「厩戸豊聡 歴史史料の

大化の諸改革 大化改新とは、 蘇我氏本家の滅亡事件と言っても過言で

は

ない。

事の始終は

『日本書紀』

が語っている。

興 る。 兄皇子の二人が大兄として並ぶことになり、 た。殺害計画の首謀者は中大兄皇子と中臣鎌足で、 飛鳥板蓋宮前庭で、しかも女帝である皇極天皇の前で殺害され 上表文を天皇に奉上するための儀式に誘い出し、殺したのであ へとつながっていく。日時は西暦六四五年六月十二日、 (寺に陣を固めたが、 それによると皇極天皇が即位したころ、中大兄皇子と古人大 事を成し得た中大兄皇子たちは蘇 蝦夷は自宅に火を放ち自害した。 我蝦夷の反撃を恐 蘇我入鹿暗殺事件 三韓朝貢の 場所は

玄理という顔ぶれの 内臣に中臣鎌足連、 左大臣に阿部内麻呂臣、右大臣に蘇我倉山田石川麻呂臣、 天皇は位を軽皇子 鹿 が 殺されてから二日後の皇極四 国博士に隋・唐に留学していた僧旻と高向 (孝徳天皇) に譲り、 年 (六四五) 皇太子に中大兄皇 六月十 四

した改新詔は、 『日本書紀』 以下のとおりである。 によると、大化二年(六四六) 月一 日に発布

新政権が誕生した。

- 私地私民制 0) 廃 止
- 地方行政 紅織 0 整備
- 戸籍 . 計帳 班 田 収 授 の法の実施
- 新税制 0) 施 行

とが確かめられている。 "日本書紀" 編纂時期等を勘案すると大宝令に潤色されたこ

年間留学僧として大陸に滞在し、隋から唐への王朝時代の盛衰 を体で感じ、発展途上国の制度をしっかり学び帰国した。そし 士という立場で国政に関与していたことである。 大化の 新 政府の特徴の一つは、 僧旻と高向玄理の二人が 旻法師 は 国 二四 博

そして、もう一つは氏姓制度の確立である。 それ以前の原始

築したのである。

また、

旻法師は他に仏教や易学にも精通して

はじめて日本社会体制の根幹を構

八省百官と呼ばれ

が

たという。

る律令官僚体制をもたらし、

その豊富な学識を新政権の中に導入し、

ち、 る。 が、 は「臣・連・伴造・国造」が使用された。「臣・連」は姓ます。 勝手に与えたり、奪ったりすることが出来た。 ように、 姓とでは血縁関係がないので、被支配者層の人民は姓を持たぬ 共同 地域を支配させるとともに、 ようになった。そして彼らは で朝廷の豪族を示し、 朝廷での職務を遂行し、人民・土地等を支配する制度であ 朝廷(いわゆる天皇) したがって氏姓制度は、 体の制度とは異なり、 姓は大・中・小豪族の身分を示す標識となり、 国家の制定に関わる大臣・大連等がでる からそれぞれ認知された「姓」をも 中央や地方の大小さまざまな「氏」 朝廷や大豪族たちへの物産や労力 大豪族の姓と各地の中・ 「部曲」の民を各地に持ち、 豪族の支配体系 小豪族 天皇が その

を提供し、勢力を誇示していった。 (例)大伴連― 大伴部-―大伴直・大伴造・大伴君

臣連姓をなのる代表的な名は次のとおりである。

臣姓 (葛城・平群・ 巨勢・蘇我・紀・ 和邇)

連姓 (大伴・物部・ 中臣・土師) など

造 馬や家畜を飼育する馬飼部等がいた。そしてその管理者には つまり、 「品部」 首 伴造」とは渡来系の人々が多く、 史などの姓が与えられた。 特殊技術を持っており、 の民を率い て朝廷の官職 武器などを鋳造する鍛 (現業職) 中・小豪族で、 につい それぞれ てい 治部 た。

臣 ・連」、「伴造」などは日常的に朝廷に勤務するの に対

朝廷のために調達しなければならなかった。 出さねばならず、更に地域住民から定期的な物資や労働力を わば地域の開拓者であり、そこの君主でもあった。 によると一二〇余の国造制を有していたという。 国 舎人」、「采女」と言われる下級文官・ 造 は、 朝廷から召集されて出頭するのであ 武官や侍女を差し 朝廷に服属 国造は る。 隋

足らは一 たのである。 れらの は朝鮮半島の高句麗・ されたのである。 族の二分勢力争 各国の情報は留学生たちから伝達された。 大しつつあって、 アジアの情勢があったと思われる。 最後に、 したがって、このような制度は次第に弱体化 百済では義慈王が実権をにぎり、 動乱は倭という国へ大きな不信感を抱かせる結果となっ 刻も早く内政の権力を一つにしておく必要があり、 大化改新における内外の背景には、 高句麗では泉蓋蘇文が権力を持って唐帝国に対抗 41 終止 時も目の離せない 新羅 符を打つべく、 百済の三国に激動をもたらし、 隋から唐帝国の偉大な国 状況であった。 新羅でも急速に国力を増 蘇我入鹿の暗殺が実行 中大兄皇子と中臣! 何といっても してい それ つ た。 5 そ 豪 鎌 家 東 0

援に応えて高句麗攻撃を開始した。それ以前、 北 辺 村江の惨敗 の三三 城 を攻撃したことにより、 ていた。 世紀前半ごろ、 六五五年、 依然として東アジアは揺 百済が高句麗とともに新 唐 軍 -は新羅武烈王の救 唐は第二代皇 n

流

1, 万の兵と合流し、白村江を遡って百済の泗沘 る。 る。 帝 国王等は唐の洛陽に送られ、 が手を結ぶことを恐れ、 ゆる「白村江の戦い」である。 六六〇年三月、 北方に逃れた義慈王を追って熊津城 太宗、 結果は成功裏に終わったわけではなく、 第三代皇帝・ 蘇定方を総督とする十万余の兵は新 高宗の 先に百済を攻略せんと考えたの 百済はここに滅んだのである。 時も高句麗に戦いを挑 (公州) を滅ぼ 唐は 城 高句麗と百済 (扶余) した。 羅 h であ で 五

日本の百済救済は二 度にわたって行われた。 その 状況を追

てみよう。

わ

朝倉 崩御する。 は S倉 橘 広庭之宮に入った。そして斉明天皇はこの年の七月にたまないますのます。 たらはないらいまや 「飛鳥を発ち、難波を経て翌年 (六六一) 三月に娜大津に至り、 斉明天皇六年 (六六〇) 十二月、 天皇・ 皇太子ほ か 朝 廷たち

は再び た。 この時の戦いは苦戦であっ 王子豊璋を護衛する五千余の兵とが玄界灘を渡った。 七月十七日、 は翌天智元年(六六二)に白村江の周留城 した。 斉明七年(六六一)八月、 この 阿倍比羅夫・上毛野稚子らの率いる二万七千人を派遣 詩の 唐と新羅の将軍は陸・ 新羅 兵は東国を含む首長や農民にまで及んだとい 0) 文武王は熊 た。 阿ぁ .倍比羅夫が率いる一七〇隻と、 水軍に熊津江を下らせ、 津城に向けて出発 天智二年 (六六三) 三月、 (州柔) で即位した。 唐 王子豊璋 軍と合 日本

のほり 軍が日本船 に立て籠もっている王子豊璋に迫った。 四○○隻を焼いた。この時「煙と炎は天をお 八月十三日 お 唐 0)

海水は赤く血に染まった」と伝えられている。

麗に逃走した。 隻が戦列をしいた。 日本軍は惨敗を喫し、 八月十七日、 唐・新羅連合軍は周留城を包囲 そして八月二十七・二十八日激戦となり、 百済軍は戦いに敗れた。 王子豊璋は高句 į 水軍一 七〇

北部 この戦乱後、 九州 から瀬戸内海にかけて防衛体制を整備することにな 日本は唐 新羅連合軍を恐れ、 大宰府を中心に

発掘調. 代山城等は、 紀』、『続日本紀』 衛体制を強化したのである。これら一連の古代山城は『日本書 等を造り、 の両城を築き、 城を築いた。 天智三年 査が進行するにつれ明らかになるであろう。 東アジアの玄関口である対馬には金田城を築き、 (六六四) 引き続き天智四年 (六六五) には大野・椽 実際対外的役割を担ったか否かは定かでない 瀬戸内海には長門・屋島、そして大和の高安城 によると一四例が記されている。こうした古 対馬・ 壱岐 筑紫に防人と烽を置き、 (基肄 防 水

年皇位についた。 大兄皇子は、 六六七年、 都を飛鳥から近江大津に移し、 翌

天智と天武天皇

七世紀は日 した時期といっても過言ではない。「壬申 本の国 が、 内 外に大きく変動

> 、乱」は皇位をめぐる争いであり、 古代においては最大の 内乱

水

0)

といえる。

て四十六歳の生涯を閉じた。 たが、大海人はそれを辞退し、 地位は極めて不安定となった。 は、 齢・経験からして実質上、天智天皇の後継者として衆目 前は天智天皇の実弟大海人皇子が東宮に建てられ、 ある。そして、その年の十二月三日、 するところであった。しかし、天智十年(六七一)正月、 大友皇子を後継者として望むようになったことにある。 事の発端は、 大海人皇子を病床に招き皇位を大海人に授ける旨、 大友皇子を太政大臣に任命した。それにより大海人皇子 天智天皇が即位してから間もなく、 頭を丸めて吉野に出家したので 天智天皇は以前から病状 天智天皇は大津宮にお 自分の 出 それ以 話をし の一致 自・年 泛長男 天皇 0

H, れ、 合流し、 ある。 側 に入り、 を塞ぐことを命じた。大海人は吉野を家族・従者合わせて数十 人で出発し、 天皇の逝去後、 大海人皇子は舎人三人を美濃国に赴かせ、兵を集め不破道 互いに相手の出方を窺うようになった。ついに六月二十二 朝廷は、 そして二十四日に高市皇子、二十六日には大津皇子らと 川曲 その数も膨れあがっていった。 隠の駅家、 の坂下、 いたずらに時間を費やし、 大友側と大海人側によからぬ情報がもたらさ 桑名の郡家を経て美濃へと進んだようで 伊賀の 駅家、 積殖の この 各地から兵を徴集しよ 状 Ш 況を知っ  $\Box$ 「から鈴 た大友 鹿 の関

皇后が天智天皇の娘 は天武天皇の皇子たちと同様の扱いを受けている。 刑に処せられたが、 年の生涯をとじた。 走した。 に瀬 至るまで両軍は各地で戦闘を繰り返し、 員計画に狂いが生じたのである。七月二十二日、 たものと推察されている。 うとするが 田 で対峙した。 翌日大津京は陥落し、大友皇子は 不破関は塞が ここに大友率いる軍勢は敗 天武の時代になって、 朝廷の重臣たちは極刑・ (後の持統天皇) であることが背景にはあ れ、 筑紫· 吉備等の協力も難航 大海人皇子優勢のもと 天智天皇の皇子たち 山 斬殺・ . 崎に隠れ、 れ、 最後の決戦に 首 天武天皇 流罪などの 脳部は逃 二十五 動

11

と言える。

評制 御原宮に天武天皇として即位した。 とにより、 朝が動乱する東アジア諸国を見据え、 て有力豪族 大海人皇子は岡本宮の南に新宮を造営し、六七三年二月飛鳥浄 この などを体系化 0) 内乱 官 確 僚制 立 日本国の統一と律令制建設をめざしたことにある。 0) の意義は単なる皇位継承だけでなく、 地位の低下に反し、 0 「諸臣四1 整備を推進した。 持統天皇に受け継がれる。 八階の新官位体制」、 天皇制の思想的 そして、 天武天皇は乱の勝利によっ 大豪族たちをまとめるこ 「八ゃくさ 更に 天智・ の姓は 基盤 飛 鳥浄御原 の確立に 天武 国 両

## 記紀に見る豊前国

だけに日本の歴史の成り立ちを、この両書に頼るところが大き**に紀の成り立ち** らない人はまずいないと言っていい。それ**記紀の成り立ち** 日本人として『古事記』、『日本書紀』を知

上 年 紀 七一二 [古事記] 旧辞を、 中・下の三巻から成っている。 正月に出来上がったものである。 元明天皇の勅により太安万侶がは、天武天皇の勅により稗田阿は、天武天皇の勅により稗田阿 礼机 選 古事 録 が 記 誦 し そ 習 和 し た帝 は 五

上巻 神代史

· 中巻 第一代神武天皇~第十五代応神天皇

・下巻 第十六代仁徳天皇~第三十三代推古天皇

史書である。

『日本書紀』は、奈良時代に完成した我が国最古の勅撰の正明を表別である。

、・七世紀の記事が多く編年史書の体裁が組まれている。つとして、『古事記』は神話の比重が大きく、『日本書紀』は両書は時代的にも共通するところが見られるものの、特徴の